

## 宗教現象学について

棚次 正和

聞き手：江川 純一，奥山 史亮，木村 敏明，  
久保田 浩，藤原 聖子，宮嶋 俊一  
(2017 年 3 月 20 日，於 ハートピア京都)

藤原：まずおうかがいしたいんですけど，先生はご自身のことを何学者というふうにお考えでしょうか。

棚次：皆様にお話をする時は「宗教哲学者」と言うのが普通です。京大の宗教学出身です。なので宗教学と言ってもいいんですけど，もっと絞ってそれに哲学をつけますね。

藤原：哲学者というよりは宗教学者なのでしょうか。その二択の中では。

棚次：まさに両方を統合するという立場です。

藤原：先生は 92 年から 10 年余り筑波大学にお勤めになられましたね。

棚次：筑波に行った直後は，宗教哲学をやるんだという気持ちが強かったんですが，いろんな分野の先生方がいらっしゃいましたね。筑波では特に荒木（美智雄）先生の影響を私は受けていると思います。エリアード宗教学の影響も，多少は受けています。

藤原：先生が「祈りの現象学」という形で，現象学ということに注目されたのは，これは宗教現象学の流れではなくて，京都大学でいわゆる哲学的な現象学の方からということでしょうか。

棚次：別に博論の「祈りの現象学」は現象学をつけなくてもできたかもしれませんが，ちょっと気取ったのかな。

藤原：それはその頃の傾向として，何か現象学というものが脚光を浴びていたということですか。

棚次：そうですね。なんとかかんとかの現象学というタイトルが結構つけられ始めていた時だと思いますね。

藤原：先生はいわゆる宗教現象学というものに対してどのようにお考えなのでしょうか。

棚次：私が京大の院生の時に、武内義範先生が宗教現象学という言葉を使って、授業の中でお話をされていました。1970 年代の初めですね。でもそれが何なのかということはいくつもわからないまま、筑波大に就職が決まって、そこで荒木先生が宗教現象学についてわりとよくおっしゃっていたような記憶です。そういうこともあって、私の中で宗教現象学というのがあるんだと具体的に実感しました。それは一体どういう学問で、どういう傾向があるのか調べたりしたんですね。それを授業でもちょっと使ったりとか。わかったのは、荒木先生が院生を指導される時は、方法論をまずきちっとやるべきだということでした。それをやらないと、どういう立場で研究対象を取り上げるのかわからないので、まず方法論をやるべきだとおっしゃっていました。院生はそれで大変苦労したわけです。自分のやりたいテーマはあるんだけど、テーマを調べる前に方法論をやらなければいけない。方法論に取り組む過程で疲労困憊するのです。修士の学生なんかは、相当苦労していた。

藤原：その方法論が宗教現象学というものでしょうか。

棚次：方法論の問題を考える時に、宗教現象学はずいぶん役立つというか、自分の立場がどういう立場なのかを知るためには、わかりやすいんじゃないかと。

藤原：それは先生の哲学の方法とはまた違うものですか。先生がご指導なさる時は哲学の方法を教えられたのでしょうか。

棚次：哲学の方法というのは、どういう方法なのか……ただ筑波で教えていた時は、1990 年代から 2000 年代の初めですが、現象学とか解釈学というような方法を院生は少しは踏まえて、方法の問題を考えていたように思います。荒木先生のそういう指導法は、私にとっても納得がゆきました。つまりそれまでは、京大にいた時もそんなに方法方法って先生方はおっしゃらなかった。みんな勝手に好きなテーマでやっていましたね。特に武内先生の時はそうでした。上田（閑照）先生になってから、先生ご自身の研究テーマが絞って深く掘り下げるような感じがあったので、そういうやり方に合った学生が集まってきたと思います。武内先生の時には本当にいろんな学生がいましたね。たとえば、私の友人の嶋田（義仁）君は、アフリカの研究をやっていました。大越愛子さんはフェミニズムの研究、小田淑子さんはイスラーム研究とか、本当に宗教学の中にはいろんな人がいました。西田（幾多郎）や田邊（元）の研究とか、西洋のオーソドックスなドイツ観念論とかの哲学だけではなく、いろんなジャンルの人がいましたね。

藤原：いろいろあるとしても、何か共通しているものというのはあったのでしょうか。当時の院生の人たちに。

棚次：明らかにありましたね。そういう学生が集まってきているんだと思いますが、やはり宗教と哲学の統合、これをどこか意識しているのがみんなあったと思います。伝統的な京大宗教学の場合は、宗教経験を踏まえて、それを哲学的に反省するというやり方を取ると思います。いまは、だいぶ変わってきていると思います。宗教経験と哲学的反

省の緊張関係が消えかけている。あるいは、宗教経験を必ずしも前提としない哲学へ傾斜しているような印象です。

藤原：先生が宗教哲学を通して目指されているものと、荒木先生が宗教現象学を通して目指されているものというのは被りますか、それともかなり違うものですか。

棚次：かなりの部分は重なり合うところがあると思っています。荒木先生は民衆宗教の研究をなさっていて、宗教的なエリートではない、むしろ民衆の持っている潜在的な宗教の力というものに着眼されていました。私の場合は、民衆であれエリートであれ、宗教性があるというレベルでは同じだと思っているので、それこそホモ・レリギオーススなので、あえて民衆宗教とは言いません。どちらかと言うと、私の方は神秘主義的なところに惹かれるところがあったんですね。荒木先生はあまり神秘主義のことはおっしゃらない。

藤原：荒木先生は民衆宗教の方で、先生は民衆とエリートを分けずに、より神秘主義的な方向からということですが、どの辺りを目指されているのか、その共通点みたいなところはどういうふうにお考えですか。

棚次：私が宗教性とかホモ・レリギオーススという言い方をする時には、やはり何か根源的なものあるいは究極的なものを人間は志向する、そういうものを求めている、あるいはそういう自然本性が人間にはあるという、その捉え方ですね。それは道元とか親鸞とかの宗教的なエリートであれ、一般民衆であれ同じだと。私たちはここでいま呼吸をしています。これは実存的事実ですが、この実存はそれ単独では何か自己完結しないというか、何か満たされないものが常にある。それを補うものを探すことになる、やはり何か絶対的なものをどこかで意識したり、自覚したりしないと、この空虚感は埋まらないというのがあるんですね。もちろんそういう絶対的なものが、もはや改めて問われないほど自分の中に収まっている人にとっては、そんなことは言わないはずで。淡々と生きると思いますが、ただそんな人は比較的少ないでしょうね。

藤原：それは現代人の問題なのか、人間の普遍的な問題なのかということに関しては。

棚次：私はそういう実存が持つ一種の構造的普遍性みたいなものは、人類始まって以来ずっとあるものだと思います。ただそれが、現代においては際立っている。際立ち過ぎて、かえってその空虚自体にも気付かない空虚さがあるみたいな感じですね。

藤原：荒木先生はその空虚さを埋める運動は特に民衆宗教から活発に起こってくるとお考えだったわけですね。それを研究なさっていて、荒木先生はその一つ一つの個別の事例を通して、人間がどうやってその満たされないものを埋めているかといったことを研究されていたというふうに理解してよろしいでしょうか。それを哲学的な方法として、何らかの思想家の思想として、それを自己との対話みたいな形で深めていくという感じのアプローチなのでしょうか。

棚次：私の場合は、哲学が先じゃなくて宗教経験が先なんです。

藤原：ご自身の宗教経験ですか。

棚次：ええ。幼い時に母の影響を受けていました。いわゆる新興宗教、世界救世教の信者でしたので、母は。その影響を受けていると思います。ただ大学に入った辺りで、そこからはだんだん離れていきました。自分なりに模索をして、たどり着いたのは、五井昌久という白光真宏会の主宰者の教えですね。それがベースにあるんです。ただそれをそのまま学生に語ると学問にならないですよ。だからできるだけ、単なる信仰告白ではないような形で、他の方にもわかってもらえるように思索をするということを心がけたんです。だから哲学が必要になるんです。

藤原：その場合の哲学は西洋哲学でしょうか。

棚次：そうですね、京大時代に学んだのはフランスの哲学で、アンリ・ベルクソンとかガブリエル・マルセルですね。周りはみんなドイツ観念論なんかやっていました。カントとかヘーゲルとか、ハイデガーとかヤスパースをやっていましたけれど、私は皆さんと同じ方向に行くのはちょっと嫌なので、フランス系をやって。

藤原：筑波大学で荒木先生と同僚になられるまでは、特に荒木先生のことはご存知ではなかったのですか。

棚次：知らないです。お名前は知っていましたし、えらいドスの利いたお声でしゃべる方なので、すごい方がいるなど。どうも荒木先生と長谷（正當）先生が同級生でいらっしやるということは後でわかりましたが。京大宗教学出身者の中でも、やはり荒木先生は特殊というか、際立った存在だったと思いますね。京大は京都学派ということで、西田とか西谷とか田邊とかをやる人が多いんです。荒木先生はそういうのは直接はおっしゃらなくて、差し当たりはエリアーデ、それからアメリカの宗教現象のお話だとかをしておられました。本当に捕まえようとしているところは、そんなには違わないのだろうと思います。ただ、エリートが考えたような宗教哲学をやる人と、民衆宗教に着目する人とで分かれてますが、その最終地点はそんなに変わらないんじゃないかなと思います。あるいは宗教経験自体は単純でも、それを言葉で表現するとややこしくなるんですね。

藤原：おそらく先生からご覧になると、荒木先生と先生の間はそれほど遠くなく、むしろ近いのではと思うんですけど、荒木先生はかなり宗教哲学に反発なさっていた面もあるようで、京都大学でご自身がカントを研究されていたことをかなり後で批判的にご覧になっていて、アメリカに行ってエリアーデというすごい人物に出会って大きく変わったと思っているんですよ。

棚次：荒木先生はですね、エリアーデのところへ行って勉強したいとおっしゃった。そのとき、予備的な勉強が必要だと、君は何を読んだのかと尋ねられて、カントを読みま

したと答えたら、それで十分だと言われたそうです。だから無駄ではないんですね。ただ荒木先生は、一人の優れた天才的な思想家の脳裏をよぎったようなものに、命をかけるのはどうかなとよくおっしゃっていました。だからカントだとかヘーゲルだとかそういう天才的な思想家だけを取り扱うのは、荒木先生はあまりお好きじゃなかったんでしょう。むしろ全人類の普遍的な宗教性とか、宗教現象みたいなものにご関心があったんですね。

藤原：荒木先生がそちらの方に变化していった、京都大学の主流とは分かれていったのは、これは何がきっかけになったのかと言いますかね、原因は特にこれといったことはなくて、自然にそうなったのでしょうか。

棚次：自然でしょうね。

藤原：アメリカに行く前に、既にエリアーデに学ぼうということで方向転換されていたということですよ。

棚次：荒木先生の場合もね、金光教を信仰しておられましたので、それがベースになったんだと思います。そういう世界を学問として研究するのには、どういうスタンスがいいのか。そうすると、必ずしも宗教哲学ということにはならなかったんでしょうね。

藤原：それに対して棚次先生は宗教経験というところで共通点を見出されたので、民衆の宗教だろうと、宗教哲学だろうと、そここのところは変わらないということで、哲学的なことを選ばれたということでしょうか。

棚次：そうですね。学問というのは知的直観があつて、それを論理的に言語化するというかロゴス化するという、直観と論理の共同作業だと思うんです。私は直観志向が強いんです。直観的な人間で、いい悪いってすぐ判断しちゃうんです。学問の中ではこのやり方は通用しないので、ちょっと哲学的というか論理的な思考を訓練した方がいいんだらうなと若い時から思っていました。

藤原：先生はその訓練は、京都大学の他に留学をなさって、シカゴ大学にはシニアフェローとしていらっしゃっていますよね。95年から96年に。その他にヨーロッパに留学なさったことは。

棚次：ありません。一回しようと試みたことがあるんですが、試験に落ちた。代わりに嶋田君が受かって、フランスに行っちゃった。

藤原：シニアフェローとしてシカゴにいらっしゃったのは何か、特にシカゴでというのはあったのでしょうか。

棚次：特に何かをやろうということではなくて、荒木先生にご相談したら、シカゴ大が

あるよと。先生がよくご存じだからというので、すんなり留学できたんです。

藤原：では divinity school の History of religions に所属されたと。Philosophy の方ではなくて。その時に受け入れの先生はどなただったんでしょう。

棚次：フランク・レイノルズ先生です。お世話になったのはゲアリー・エバーソル先生ですね。私はその研究所の研究員で、研究室も与えられたんですが、あまり行かなくてね。研究会もありましたが、あまり行かなくて。どうしたかと言うと、シカゴに行った時のことは細かく手帳にメモしてしまってた。95年の5月10日にシカゴに着いているんですが、とりあえずリスニングアビリティがないので、カレッジへ行こうと。それで、ダウントウンにハロルド・ワシントンカレッジというのがあって、そこに学生として潜り込んで、3ヶ月ほど授業を受けたんです。その後9月ぐらいになって、博論を書こうと思い立ちました。住んでいたのは、ルター神学校のアパートです。そこで9月ぐらいから、朝早く起きて博論を書いていました。シカゴ大に行って何かを学ぼうという気も、多少はありましたがね。たとえば、バハイ信教やホピ族のことなどは、自分で調べたりしていました。

藤原：ミネルヴァ書房の『宗教学入門』は山中弘先生とご一緒に編集されていますが、筑波の宗教学の他の先生方とのご関係は。

棚次：私の在職時には川崎信定という仏教学の先生がいらっしゃいましたし、それから荒木先生。そして、私が行った時に竹村牧男先生が教授になられた直後だったかな。その一つ下に池上（良正）先生がいて、そのさらに一つ下が私という構成でした。やはり刺激は受けました。京大の宗教哲学ではないスタイルの学問をやっている人が、周りに大勢いたわけです。いろんな学問的なポジションがあるなと思いました。竹村、池上、私というのが当時若手三羽鳥と呼ばれていたんですが、残念ながら3人とも筑波には残らないで、出て行っちゃいましたね。やっぱり筑波独特の、文科省に近い官僚的な雰囲気があって、ちょっと合わないところがあったんですかね。いまどうかわかりませんが、当時は三学期制で、非常に忙しかったんです。（チャールズ・）ロング先生なんかは、荒木先生が何度もお呼びになっていました。私がシカゴに行く年の3月末くらいにもロング先生が来日されて、熱海の救世会館（世界救世教の施設）を見学する宗教学実習の時に、先生がお話をされたんです。荒木先生繋がり、アメリカの宗教学者の方が何名かちょくちょくいらっしゃいました。荒木先生は海外科研を毎年のように取られていて、不思議に思っていました。

藤原：先生はロング先生の宗教学をどう評価していらっしゃいますか。

棚次：よくわかりません。詳しくは存じ上げないですね。ただ黒人ということのハンディキャップはあるんだろうなと思っていました。しかしそうでありながら、あのような国際学会のトップに立てる力量をお持ちの先生だろうなと思っていました。学問の内容がどうのこうのというのは、実はよく知らないんです。カーゴ・カルトの話だとかいろ

いろいろお聞きしたんですが、エリアーデが目指していたような捉え方で、ロング先生のご関心がある領域を研究されていたと思います。

藤原：先生が京都大学で学生をされていた時に、武内先生から学ばれたような宗教現象学と、筑波で荒木先生あるいはロング先生が言っている宗教現象学というのは、同じものですか、それともかなり違うものですか。

棚次：難しいご質問ですね。私の宗教現象学に対するイメージは、どちらかと言うと筑波に移ってから自分なりにいろいろ模索しながら、宗教現象学関連の学者の本を何冊か読んで抱いたものなんです。私の研究が宗教現象学の方法かと言われたら、よくわからないというのが正直なところですね。というか、宗教現象学は一体何なんだろうと、いまも思っています。この本（『宗教の根源』）にもちょっと書いていますが、いくつか流れがありますね。トゥイスとコンザーの、学生向けの宗教現象学のテキスト（*Experience of the Sacred: Readings in the Phenomenology of Religion*）があって、彼らが分類しているのは、最初に本質的な宗教現象学がある。オットーとかシェーラーみたいなね。その次の段階が、エリアーデとかクリステンゼンとかの歴史的・類型論的宗教現象学。これは本質的現象学の批判として、そういう立場が出てきた。ところがもう一つ、3つ目の流れがあって、これは実存的・解釈学的宗教現象学で、ポール・リクールがそれに該当します。それぞれ部分的にはオーバーラップしているのですが、最後の3つ目の流れで、宗教現象学が決定的に転換したというふうに書いていますね。初期の現象学は、たとえばエポケーだとか還元だとか言って、何か直観の能力が自明視されており、そういう能力を人間は本質的に持っていることを大前提にしていると思うんですが、それに対する批判として、2番目の現象学も出るし、3番目の実存的・解釈学的なものも出るわけですね。人間というのは実存構造というものがあるって、その構造に大きく認識が規定されているということです。コギトのような透明な自己意識を持つ前の段階で既に制約を受けている。身体性もそうだし言語性もそうです。そういうのを踏まえた宗教現象学が第3番目の流れだと、その本では書いています。気になるのは、いま宗教現象学があるとしたら、どういう形なんだろうということです。先ほどのお話だと、もうそれは消えたということですか。

藤原：私の認識としては、90年代中頃以降は誰も宗教現象学ということを言わなくなってしまって、荒木先生や筑波の人たちは引き継ごうとしていたと思うんですけど、他ではぱたっと、世界的にもそうだと思いますけどね。特にヨーロッパの宗教学は、人文系から社会科学系に変わって、それまでの歴史学的なことをやっても研究費をもらえないということになってきて、現代の社会に役立つものをやらなくてはということや、理系に近づけないと学問じゃないと言われるようになってきたということのようで。アメリカの方はエリアーデ批判みたいなことで、宗教の固有性とか、そういったことを言うのは駄目だという批判になっていますね。

棚次：京大の宗教学もですね、今度の宗教哲学学会の大会が今月中にあるんですが、脳科学がどうのこうの言っていますね。ここ十年くらいの間に言われ始めたようですが、そ

んなのは、「えっ」という妙な驚きはありますね。

藤原：それは芦名先生が中心になられてということではなくて、かなりいろんな方が関わっていらっしゃるのですか。

棚次：どうでしょうか。今度いらっしゃるのは井上順孝先生とか沖永（宜司）先生です。宗教現象学の流れがまだ潜んでいる、まだ途絶えていないとすれば、確かに実存的・解釈学的な、そういう宗教現象学が現れたかもしれないけれど、個人的にはもう一回その流れを反転させる必要があると思いますね。これは人間観の問題に関わってきます。確かに人間の実存的な構造というのがあるのは間違いないですが、実存だけが人間かというところではないと思うんです。この辺りは私の宗教経験とも絡んでくる話になります。要するに、人間というのは死んだら終わりかというところ、どうもそうではない。実存的な人間は死にますよ、間違いなく。しかし、死んで終わりだと思っていない人間がもし学問をするとすると、どういう形になるのか。実存とそれを超えたもの、この両方を視野に入れる、そういう学問になる必要があると思っています。いまの世の中の流れとはちょっと違った方向に行っているかもしれません。実証とかエビデンスという言葉は、もっと別の意味で使えるのではないのでしょうか。客観的事実として実証するという以外に、自分の経験的事実として自覚するとか掘み取るとか。実証ではなく自証とか内証とか、そういうレベルの学問があってもいいと思います。その自覚や自証だけだと上手く行かないので、両方を視野に入れる。死の問題はいま非常に切実な問題ですね。医療の世界でもそうです。医者は死は医療の敗北だとして、極力見ないようにしているんです。人間は死ぬんだという、その事実をしっかりと視野に入れた医療はいまやっていませんね。緩和ケアとか部分的にはありますが。死の問題が落ち着しない限り、私たちは人生の中で、確実に一步一步踏みしめることができない。この問題はきちっと解決される必要はないかもしれませんが、ある程度こうだというふうなことがわからないとね。いつまで経っても不安とか恐怖は消えないと思うんですね。不安とか恐怖がいけないとは言いません。それはあって当然だと思うんですが、極度の不安とか過度の恐怖心は必要ないので、それは乗り越えないといけない。私のようなやり方は学問なのかどうかという気がします。学問としてきちっと認めてもらえるかどうか。しかし、では学問とは何かと聞き返すと、皆さんはどう答えますか。たとえば、何で藤原先生は勉強されているんですか。

藤原：そうですね。勉強しているというか、勉強をさせられている感じですね。必ずしも誰がやれと言ったのではなくて、自分に与えられたことを、究極的な意味ではなくて、そこにあるので、続けられる限りはやるというそんな感じですね。先生はどんなことを目指しておられますか。

棚次：どこかにも書いたんですが、学問する以上は、できるだけ目覚めた意識を持ちたいと思っているんです。それは宗教的に言うと、悟りだとか、覚醒だとか、あるいは救済という言葉を使ってもいいかもしれませんが、そういう目覚めた意識を持たないまま学問するのも、それはありだと思いますが、私自身は学問的な探究は目覚めて真理が多



少なりとも明らかになる、これが重要だと思っています。いろいろやったけれど結局わからなかったでは、何かつまらないと思いませんか。ほんの少しでも、ああそうかとわかるのが大事だと思うんですね。おそらく皆さんも、研究をなさっていると時に閃きがあると思うんです。それを大事にすると言いますかね。目覚めるといのは、私たちは肉体を身にまとってですね、限定された実存的構造の中で生きているわけで、これはこれとして大きな意味があると思うんです。盲目的にこういう状態になっているんじゃないくて、おそらく意図的になっている。ここでのさまざまな経験を経ることによって、なにがしか学んでいると思う。この学びが重要なんだと思います。これは学問でなくて、生きているプロセス自体がある種の学びのプロセスですね。学問をする以上は、目覚めを目指すべきだと、私の中では思っているんです。それはそれぞれの目覚めがあると思いますね。

藤原：荒木先生は目覚めていた学者だと思われませんか。

棚次：荒木先生は荒木先生なりに目覚めていたと思います。荒木先生のすごいところは、いろんな宗教現象がありますが、その核心部分をぎゅっと掴むんですよ。ぎゅっと掴んで例のドスの利いた短い言葉でぼろっとおっしゃる。それがすごくうまい。ああいう語り方ができる学者は少ないと思います。人によると、それが嫌だという人もいますね。私は荒木先生とは適度な距離というかな、まったく荒木教の信者になって信者として振る舞う院生もいましたけれど、そういうのには私はなれないですね。しかし、宗教の本質を掴まえるのがうまいなど、いつも思っていました。

藤原：そうすると、エリアーデやリクールなんかも目覚めた学者とお考えですか。

棚次：はい、特にエリアーデは。

木村：先生が祈りということをテーマにされたのはいつ頃、どういうきっかけからでしょうか。

棚次：当初は博論で書こうとは思っていなかったんです。博論を書けと荒木先生に言われたんです。筑波に就職して、やはり学位は取るべきだと言われ、それで考えだしたんです。祈りというのは私にとっては非常に身近なものだったので、これを研究対象にするのはちょっとしんどいなど。空気を吸いながら空気を研究対象にするような息苦しさを当初は感じていたんです。でもいろいろテーマの候補を削っていくと、これが一番いいというふうに思ったんですね。だから筑波大学に行ってから、1992年以降ですね。筑波に行く条件が2つあって、1つは博論を書くこと、もう1つは留学すること、その2つだったんです。留学は95年に実現したわけです。博論はもうちょっと遅れましたけど、97年だったかな、京大に提出しました。学位取得は98年1月です。

木村：祈りに関してはハイラーの研究がありますが、ご自分の研究と比べて違うところとか、そういうものはあるでしょうか。

棚次：そうですね、ハイラーの *Das Gebet* は全部は読んでいません。ここは大事なところと思うところ 100 ページとか 150 ページくらいを読んで、ハイラーの箇所は書いたわけですが、ハイラーに限らず、欧米の学者が祈り、*prayer* や *prière* とか *Gebet* という言葉を使って説明しますが、基本的にはお願い、願いとか懇願とか、そういう意味がまずあるんですね。日本語の「いのり」はそうではありません。私は特に語源に着目しました。そうすると「イ」というのは「息」、呼吸でもあるし、聖なるものというか「靈威」という意味もあります。「ノリ」は宣言する、宣りだすということで、簡単に言うと、いのちの宣言が「いのり」なんだ、これが日本語の「いのり」だと思いましてね。そこからすると、欧米の祈り論は、それはそれでいいんだけど、日本人の私が祈り論を展開する時は、また違った捉え方になると思いました。「いのり」の概念の方が広くて深いのです。

木村：そのように日本語の語源みたいなところに返っていったのは意識的にと言いますか、日本人としてというようなことを考えられてなのでしょうか。

棚次：そうですね、あんまりそれを強く出すつもりはないですが、私は何か考察する時に、語源には着目しますね。というのも、言葉というのは流動する現実世界を裁断しているわけで、そこに人間が言葉に込めた原本的なイメージが宿っている気がするんですね。あまりそういうものを無視して研究しない方がいいと思っています。

木村：その辺りは先ほどおっしゃった解釈学的というような問題とも関わってくるものなのでしょうか。

棚次：そうですね。たとえば私の『宗教の根源』みたいな研究は、これが翻訳されると多少は意味があるでしょうが、日本人の間だけで読まれている限りはあまり意味がないかもしれません。欧米の祈りの研究者も、いくつかあるうちの一つのスタンスだということになかなか気付かない。だから欧米の研究者から見ると、そんなものが祈りですかとなるかもしれない。私はごく単純に、いのちの宣言、いのちが生き生きと生きること、これが「いのり」だと思っています。いのちの響きを言葉とともに宣りだすということ。この祈りの研究は、昔の日本の思想でいうと、言霊の思想と繋がってくるんですね。

木村：私がすごく興味を持ったのは、祈りの研究なんかに関して、先ほど脳科学の話なんかもありましたけれど、理科系の方々と一緒にずいぶん共同研究をされていましたよね。

棚次：いまやっているのは、「サムシング・グレート」で有名な村上和雄先生と、「祈りと遺伝子」という共同研究をやっています。もうデータが少し出始めて、解析しているところです。だからエビデンスを求めているわけです。それはエビデンスが欲しい人のための研究なんです。欲しい人がいるので、それを無視しては気の毒なので、こういうエビデンスがありますよと示してあげればいいわけです。それで気付く人もいますから。

木村：元にあるのは直観と言いますか。

棚次：そうです。エビデンスがなくても、それはそれで祈っている人たちは大勢いるわけですので、どちらでもいいんですね。

木村：その辺り、先生のされている宗教学の王道を行くような、宗教現象学的な研究と、そういう理系的な発想がどうやって結び付いているのかというような辺りが、それはどういう経緯で始まったんですか。

棚次：共同研究ですか。あれは村上和雄先生からお電話があって、今度こういう研究をしたいんだけど、協力してくださいということでした。「祈りと遺伝子」がテーマです。村上和雄先生の甥御さんに村上辰雄さんがいますね。筑波大出身で、ロング先生のところで勉強していた、あの村上さんが、祈りの研究者として私を推薦してくれたらしいんです。それで私の方に連絡があって、ご一緒にやることになりました。ところがなかなか科研が当たらないんですよ。2, 3 回出したけれど当たらなかった。厚労省の方にも出したと思いますけれど当たらない。審査員の丁見が狭いねえと。面白い研究なんだけれど当たらない。それでどうしたかと言うと、高野山大学で委託研究員として数年間研究をしたことがあって、そこに寄付講座ができたんです。その資金を使わせてもらえるかなというので交渉したら、OK だった。高野山大学・密教文化研究所所長の中村本然先生と私が知り合いだったことも大きかった。祈りの実証的研究というのは、祈っている人も知っていると思いますが、それで祈りのすべてがわかるというものではなくて、その一端が示せるだけです。それでも意味があると思うんですね。

木村：そういう成果を理科系なり、医学系なりの人たちの前で発表されたということはあるんですか。

棚次：まだないですね。内輪で研究成果については発表したことはありますが。学術雑誌に発表することを何度も試みているんですが、なかなかパスしないんです。いろんな手順の問題があったりとか、被験者の数が少ないだとかのクレームがついて。出すところを間違えたのかもしれません。*PLOS ONE* という雑誌なんです。上手く行かないですね。(※その後、共同研究の成果の一部は、学術雑誌『ヒトゲノム』に掲載されました。Ohnishi J, Ayuzawa S, Nakamura S, Sakamoto S, Hori M, Sasaoka T, Takimoto-Ohnishi E, Tanatsugu M and Murakami K, “Distinct transcriptional and metabolic profiles associated with empathy in Buddhist priests: a pilot study, ” in *Human Genomics*, 2017 Sep 2; 11(1):21.)

宮嶋：それを受けてというか、今日のお話をうかがっていて、木村先生がお尋ねしていることなんですけど、棚次宗教哲学というのを振り返ってみた時に、まず第一期が京大時代の武内先生とかから学んだ時代。それから第二期が今度は筑波で荒木先生と交流した時代。それで、いまの話は第三期とおっしゃっているのか、京都府立医科大学時代というのが、次の期間としてあると思うんですね。前にお話をうかがった時に、やっぱり

お医者さんはわかってないよというような、今日も死の話が出てきて、特に死の問題について、棚次先生のお考えとお医者さんたちとの間で意見の相違とかがあるんだということをおうかがいしたことがあるかと思いますが、そこら辺の、京都府立医科大学時代がどういう時代だったかということをお教えいただきたいです。

棚次：おっしゃる通りです。京都府立医科大学に何年いたかというとな、筑波で教えている時に私は単身赴任だったんです。もう十年くらい教えていたので、このまま定年まで単身赴任って嫌だなあとと思って、どこか公募ないかなあと考えていたんです。そのときに、ちょうど助教の某君がやって来て、推薦書を書いてくれと言うんです。見ると京都府立医科大学。ポストが2つ同時募集で、人文科学と社会科学、どちらかが教授でどちらかが准教授で、決まっていなかったんです。それで、君どっち目指すの、准教授だよ、じゃあ私は教授で出すからと言って、出したんです。それで通っちゃった。それまでその公募のことは全然知らなかった。幸か不幸かそこに決まったので、喜び勇んで京都に帰ったわけです。するとあの世界はね、異界なんです。この世じゃない、異界なんです。それは異なる世界であると同時に、医者の世界、医界ですよ。赴任のちょっと前かな、『千と千尋の神隠し』の映画が流行っていて、ここは異界だな、私は千尋だという感じで、ずっと悩んでいましたね。結局、退官するまで悩みました。共同研究ができないんです。そういうことをやろうという人が誰もいない。彼らはもっと目先の研究、科研費とか厚労省の研究費が取りやすいような研究テーマに絞るんです。だから人文系と理系の共同研究みたいなものは、そもそも医者の頭の中に発想がないんですね。話をしてみると、周りに私の話題に興味を示す人がほとんどいない、完全に孤立したという感じです。何か私なりにできることがないか調べていると、スピリチュアルケアとか緩和ケアがあり、それから生命倫理の研究やホリスティック医学があることに気がしました。でも生命倫理の研究も、宮嶋さんはよくご存知だと思いますが、一定の枠の中での研究になっていて、はみ出ないんです。なんていうかな、一般常識的な枠組みがあって、その外に行かないんですね。既成の枠の中で生命倫理を扱うわけです。これは人の生命を扱うスタンスとしては非常に狭い。宗教学の立場からすると、生きている世界と死んでいる世界が同時にある。今日はお彼岸の中日で、この世とあの世が接近していると私は思っています。あの世とこの世の両方を包み込むような視点を持たないと、生命というものはわからないと思うんです。そういうものをも見据えたような生命倫理をやろうとしたんですが、難しいですね。

藤原：先生のいまおっしゃったことは、医学者と言いますか、理系の人たちだけではなく、先生のお考えでは文系も、信仰を持たない人は宗教学はできないとか、宗教のことは本当にわからないんだとかお考えですか。つまり人間は死んでその先もあるんだということを信じていない人には宗教のことは本当にわからないという。

棚次：そこまでは言いませんが、それがわかるかどうか大きな分かれ目ですね。こうやってここでいま呼吸しながら生きている、この実存的なところだけを踏まえても、宗教学の研究をすることはできると思います、ある程度は。ただ、先程言ったように、可能な限り目覚めた意識でやろうとすると、死んだ世界が視野に入ってくるんですね。た

またまかどうかわかりませんが、私の知り合いに死後の世界に通じている方が何人かいるんです。私は2年前に母が亡くなりましてね、往生してくれたと思っていますが、知り合いに「母はいまどうしてますか」と聞いたら、いまこうしていますよと教えてくれるわけです。いま横にいますよとか、死んでしばらくどういう状態になって、それから本来の世界に戻ってどうのこうのと、かなり具体的に教えてくれるわけです。その方は、いわゆるシャーマンですね、巫女さんというか。そういう人たちの世界をも取り込んでいかないと、本当の研究にはならないんじゃないかという思いがあるんですね。

藤原：それは自分で信じなくても、そう信じている人がいるよということを理解するような研究では不足なのでしょうか。自分でもそういうことを信じていて、経験があるということはより深い理解に絶対必要だとお考えですか。

棚次：そういう経験があるかないかで、かなり解釈が変わってくるのではないのでしょうか。「ある」ということが本当にわかりきっている人からすると、当然そういう世界を視野に入れた学問になるんですね。そうしないとおかしいですよ。だからむしろ、私たちが一般的に現実と言っている世界がかなり狭いんだと思いますね。現象世界全体の数パーセントぐらいでしょう。後はほとんど隠れていますね。

藤原：そうしますと荒木先生は、そういった意味でも目覚めていたというような。

棚次：荒木先生はそういうことは、私のような言い方では言われなかったですね。もっと普通に、普通の感覚に近いと思います。

宮嶋：それと関連するんですが、今日のお話の中で直観という言葉が使われていて、先生ご自身はすごく直観が強いと。でもそれだけだと学問にならないので、哲学的な訓練が必要であるというお話をされたと思うんです。その時に直観というのは、学問的な方法論になりうるのか、そこは今日のお話の中で、自分がやっていることが学問と言えるかどうか微妙なところもあるという話とも繋がると思うんですが、直観というのは、誰もがそれを身につけることができる方法であるとお考えでしょうか。

棚次：私は、方法の中に直観を獲得するということが含まれていなければいけないと思っています。むしろ直観なき分析というのは、見当違いになってしまう。かといって直観だけでも駄目なんです。直観と分析の両方がそろってこそきわめて重要だと思います。どうやって直観を得るかという方法論が問題です。宗教現象学でもその方法の問題を扱っているわけですが、エポケーだとか現象学的還元だとか言いますね。どうやってやるのという、具体的な方法論がよくわからないかもしれない。筑波にいた時に学生たちには、何か研究する時に、まずいま自分が置かれている普段の状況のままで研究対象に向かわないで、一回それをチャラにするというか、ご破算にするようなやり方を身につけることを勧めていました。たとえば、祈りとか瞑想。こういうのを一回やって、それで研究対象に向かうべきだと教えたんですね。ただ祈りとか瞑想と言っても、どんな方法かは個人差があります。だから、自分がやりやすいやり方で、頭の中に詰まっている固

定した既成観念を一回チャラにする、リセットするような方法を身につけるべきだと勧めたんです。祈りと瞑想が一番わかりやすい、やりやすいんじゃないかと。学生はその通りやってくれたかどうかわかりませんが。某君なんかは、私が山登りはいいよと言ったら、筑波山に何回も登っていました。とにかく、通常の研究のスタイルというのは、いきなり研究対象と向かい合うわけですね。それだと既成観念を継ぎ足したような、パッチワークの研究しかできない。それを一回捨てると言いますかね、一遍上人じゃないですけど、「捨てる」というのが大事なんじゃないかと思います。

江川：そうしますと、先生にとってある種理想的だと思われる研究者あるいは研究というのはどういうものがあるのでしょうか。エリアードはどうでしょうか。

棚次：エリアードはそうだと思います。あんなことはできないですね。エリアードはすごいと思います。学問的に尊敬できるすごい人は、どなたですかね。私は京大ですけど、西田、田邊あるいは西谷という先生方は尊敬していますが、自分の宗教体験を語る時に、必ずしもああいうやり方で語らなくてもいいと思っています。西田先生はたいへん偉い先生ですが、まだ先生の目が向けられていない対象領域がいくつもあると思っています。たとえば日本の古代からの宗教の流れ、修験道であれ山岳信仰であれ、あるいは神仏習合したものであれ、そういうものはまったくといっていいほど視野に入っていないですね。そこに目を向けた宗教哲学が可能なはずだと、だいぶ前から考えていますが、なかなか実行できません。それから、興味があるのは、プラトンとか、シュタイナーですね。あるいは空海。プラトンというより本当はソクラテスと言うべきでしょうが。ただプラトンを通してしかわからないので、プラトンと言っておきます。おそらく日本の学者の中にもそういう直観力と分析力の双方を兼ね備えた人って現にいらっしゃると思うし、過去にもいらっしゃると思います。ただあまり世間に知られていない可能性はありますね。

久保田：先ほどのお話の中で、学生さんに対して直に研究対象に向かうのではなくして、自分を支えているところの常識であるとか、そういったものを一回チャラにするとおっしゃいましたね。そのスタンスがあって、違う発見的なものが見えてくるんだと。そういうスタンスのことを先生は、現象学的だと呼びになりますかね。

棚次：それを現象学の方法と呼んでもいいと思いますね。

久保田：その場合現象学という言葉が出てくるのは、エリアードあるいはリクール辺りですか。それとももっと違うコンテキストからでしょうか。たとえばハイデガーの解釈学から来ているとか、そういうことでしょうか。

棚次：それは、それこそオットーだとか、マックス・シェーラーだとか、そういうところからでも言えるんじゃないでしょうか。哲学の現象学と宗教の現象学がどう繋がってくるのか、あるいはまったく関係ないのか、その辺りはわかりませんが、繋がっているような気もしています。そういう方法は、一回限りで解決しないですよ。何度も何

度もエポケーし、還元を繰り返しやらないと見えてこないと思います、たぶん。だから、そういう研究を通して結局何をしているのかということですね。人間の本質的な普遍性みたいなものを捉えていると私は思っていますが、それは自分の本当の姿でもあるし、広く一般に人間の正体というか本体でもあるので、それが見えてくるんだと思うんです。

久保田：ただその本体というのが、先生のお考えですと実存的な存在としての人間の本体だけではないということですね。

棚次：それだけではない。それがないとこうやって生きている意味がないですから、当然あるんですが、それだけじゃないですね。あるいは、こういう実存の奥に秘めたものを同時に見るといいう言い方をしてもいいと思います。現にあるものだと思います。私が捉えようとしている世界は、現に当然あって、私の中にもそれが働いていて、みんなの中にもそれが働いている事柄だと思いますが、実存の意識では気付かれ難いと言いますか、しっかりわかっていない。それで実存と実存を超えたものが同時に視野に入ってくるという、そういうことになると思います。「現前と距離の共存」という、以前に何度か私が使っている言い方がありますが、まさにその事態を指しているわけです。

藤原：それは研究を続けているうちに徐々にわかってくるものなのか、それとも最初からちゃんと宗教経験でわかって、それを徐々に言語化することなのか、どちらでしょうか。

棚次：それは両方ですね。いろんなパターンがあると思います。だから、人生の中で大きな直観というのは与えられることが何回かあるかもしれませんが、通常は小さな直観がチカチカと閃いていると思いますね。

木村：直観のようなものを、宗教の言葉じゃなくて、哲学の言葉で語っていく意味というのはどういうところにあるとお考えですか。たとえばその実存を超えた部分は、それぞれの宗教でやっていけばいいというふうにならずに、あえてそこで哲学という言葉を使って明らかにするという意味という感じですが。

棚次：それは、京大の宗教学を学んだというところに、きっかけがあるんですね。宗教的直観をストレートに周りの連中に話してもわからないわけです。自分はわかっているけど、周りはわかってくれない。何とかしてこれはわかるような表現を持たないといけないということで、哲学的思考の訓練をしたんですね。それは一般の人と話す際には必要ないかもしれません。いずれにしても、言葉で話さないと伝わらないので、やさしい言葉で出すとどうなるのかというのが、いまも私自身の大きな課題ですね。

宮嶋：私も同じことが聞きたくて、目覚めた意識ということは何回かおっしゃったんですが、たとえば学問的な真理に目覚めるとか、たとえば医学者であっても、数学者であっても、ある種学問的な真理に目覚めるといふこともありうると思うんですが、今日のお話はむしろ、いわゆる宗教的な目覚めということだと思ったんですね。ただ学問的な

探究が、宗教的目覚めに通じるのだという、もしそれが目的だとすると、宗教的な活動と、先生がおっしゃる宗教哲学的な営みというのは、同じことにはならないのか、いかがでしょうか。

棚次：そうですね、繋がっているとは思いますが。繋がっているけど、私は同じことでもないと思っています。

宮嶋：その違いはどこにあるとお考えでしょうか。

棚次：やはり言語化ですね。言語化ですけれども、学問的な言語化です、宗教哲学はね。たとえば宗教経験という、こうやって話をしながら祈るみたいなものも、一種の宗教経験になりえるわけです。でもそれだけだと学問ではないですね。

宮嶋：その部分が直観に対する分析と先生がおっしゃる部分ですね。それが学問的な言語化を意味するということですね。

棚次：そうです。直観の方法を語った哲学者は、実はベルクソンなんです。私は京大時代にベルクソンを勉強したので、その影響はかなり強いと思います。ただ筑波にいた時もそうですが、私の関心はわかる人はわかるし、わからない人はわからないんです。これは現に先生方との対話でも、そうだと思いますよ。

久保田：違う次元から話をさせていただきたいんですけど、たとえば宗教経験を他の宗教経験を持っていない人間に対して、通用する言葉で言語化しようとする、それは今日の話ですと哲学的な概念を使いながら言語化することだと思うんですけど、一方で宗教経験を理解しようと思う非宗教者は、その人が持っていたいまま常識だと思っていた言語を超えなくちゃいけませんよね。そちら側への訴えかけというのは先生はなさるおつもりはありますか。つまり先生の宗教経験の言語化、私の頭の中にあるのはハーバーマスの共同翻訳なんですけれど、宗教経験を持っている側からの宗教経験を何らかの形で他者に通じさせるような言語に変換していくという。ただし、それは一方的な作業なのであって、もう一方で向こうからの、向こうが常識だと思っている言語を違う言葉に変えてもらわないといけないのかなと思うんですけど、そこら辺はどうお考えですか。

棚次：難しいですね。私の理解では、すべての人間はホモ・レリギオーススだというのがまずあるんです。それは違いうだろうと言われたら、えっと驚くしかないんです。というのは、どんな人間も本体は、ありきたりの表現で言うと神・仏なんです。神性や仏性を本来持っています。だから、私のような宗教経験を踏まえて言語化することとは、もちろんわかる人とわからない人がいるんですが、わからない人も永遠にわからないかということそうではない。いまたまたまそういう状況になっているだけというふうに私の中では捉えています。



久保田：非宗教的であると自覚している人間が気付く素材を、こちらは与えることができるという感じですかね。あるいは、ある程度別のきっかけによって、気が目が覚める、向こうに生じてくるということでしょうか。

棚次：非宗教的な人というのは、一見すると大勢いらっしゃるんですが、それは見かけのことであって、その人の本体はそうじゃないと思っているんです。だから、これがもう既に宗教者の見方なんですね。

久保田：そこら辺のお考えと、エリアーデのニューヒューマニズムというあの考え方というものには、何か共通項があると思いますか。

棚次：あるでしょうね。

奥山：少しエリアーデについてうかがいたいんですけど、エリアーデが目覚めた意識を持っていたとおっしゃいましたけれど……

棚次：そういう時もあったであろうと思います。彼の資料の読み方が重要ですね。ほとんど死と再生の儀礼に近いようなことを自らに課して、資料の中に溺死するような、古い自分に死んで、死なないと資料の本質が見えてこないというような解釈の仕方をエリアーデはしたわけですね。ずっと目覚めっぱなしだとは思っていませんが、学問的な営みの中で、エリアーデは目覚めた瞬間があったはずです。

奥山：そういう体験があって、エリアーデの解釈というものが成り立っていると。

棚次：そう、思います。もちろんそれは、アンチ・エリアーデから見ると、とんでもない勘違いだということになりますかね、私はそうは思わないのです。細かく言うと、いろんな資料の扱いが間違っていたりとか、エリアーデもあるんだと思いますが、それは本質的な事柄ではないかもしれません。どういう研究をするにしても、「蟹は自分の甲羅に似せて穴を掘る」と言いますが、結局それをやっているんだと思いますね、すべての人が。それだと本当の意味の研究になるのかな、私の研究もその類だよと言われる可能性もあります。もうちょっと、何かスカッとするような、目覚めた世界があると思うんです。それが明らかにあって、ほとんどすべての人はスカッとした瞬間を明らかにみんな知っているはずなんです。ただすぐ忘れるんですね。そこから落ちるといいます。落ちたところに馴染んでしまっていて、それを思い出さないということだと思います。その落差の感覚をどうやったら確認できるかという、やはり祈りとか瞑想ですね。これを繰り返しやることによって、その落差に気付くと思うのです。

久保田：話題が行ったり来たりしてすいませんが、先ほど先生が宗教現象学というふうにお考えになった時に、それは筑波に行ってからいろいろと勉強し始めたとおっしゃったんですけど、京大で武内先生が宗教現象学という言葉をお使いになりながら授業をなさっていたと思いますが、武内先生の宗教現象学というのはどんな感じだったかとい

うのは。

棚次：当時のノートが残っているのでそれを見たら思い出すでしょうが、あまり記憶になくて、とにかくエリアーデがこんなことを言っていたとか、彼の人柄とか、そういう紹介をしてくれましたね。実は、西谷啓治先生もエリアーデについて話をされたことがあるらしくて、京大の先生はそういうものにも関心があるんだと感心していました。武内先生は私が学生の時にはずいぶん優しい先生になっていて、お若い時はたいへん厳しかったという噂でした。軍隊の司令官みたいな感じで、学生を厳しく指導された。ただ、私の頃には、非常に優しい好々爺で懐の深い先生という印象でした。

久保田：先生はその頃の講義ノートとか持っていらっしゃいますか。

棚次：探したらあると思います。そういうのを見直してみると、きっとすごいんでしょうね。こんなことを当時は話していたんだという、すごい発見があると思います。いま私たちがようやく気付いているようなことを、すっかりあの当時に話されていたはずです。

久保田：別の話なんですけれど、山中弘先生とご一緒に『宗教学入門』という本を書かれたというお話がありましたが、あの本を書かれた経緯というものはどういったものでしょうか。

棚次：あれはどういうことかという、ミネルヴァ書房から出たんですが、最初は荒木先生を編者にした『世界の民衆宗教』が、同じミネルヴァ書房から出ているんです。いろんな内外の学者が書いた民衆宗教の本ですが、その出版交渉に私が行ったんです。すると、これはいいかもしれないけど売れないので、売れる本と抱き合わせだったら考えてもいいという話でした。それでしたら、テキスト作りますからと言って、『宗教学入門』も出したのです。だから事柄の経緯としては、『世界の民衆宗教』の方が先なんです。執筆者の数が二十数名と多いので、Eメールでのやり取りに苦労したのは覚えています。昔みたいに郵送じゃなくて助かりました。あの本は、「宗教経験」のスタンスと「社会」のスタンスという2つの視点を複眼的に合わせたんですね。

久保田：そこら辺の構想は山中先生と2人で。

棚次：ええ、話し合っ。山中先生と私が編者になるので、両方の立場が反映されるようにということで。お蔭様で、出版して十年以上経ちますけれど、一万数千部売れていると聞いています。内容的に書き換えた方がいいかなと思うところはあるんですが。

藤原：その時にお読みになったテキストはどういったものですか。

棚次：筑波の時はとにかく大学院の院生の指導が大変だったですね。特に博論。これがね、学生たちはなかなか博論を出さないんですよ。まとまらないというか。ずるずると

延びるんです。院生の指導をどうするかということで、ずいぶん悩みました。博士と修士ですね。学部の授業ももちろんあったんですが、中心は院生の指導でした。だいたい修論の段階で、修論の口頭試問の際にどうするかというと、主査と副査がこてんぱんにやっつけるんです。というのは修論を書いた頃が一番学生が天狗になっているときなので、その鼻をへし折らないと、学者としては大成しない。もう寄ってたかって欠点を指摘するんです。もちろん、修論の本当の欠点や不備をです。すると学生もペしゃんこになる。その後可哀想なぐらいへこみます。それを乗り越えると、ようやく一人前の学者になるという感じですね。

宮嶋：先生のところの院生って、いま研究者として活躍されている方はいらっしゃいますか。

棚次：私が関わったのだと、土井裕人君。プラトンの宗教思想で学位を取りました。いまは情報処理やコンピュータ関連のものをやっているようです。プラトンとか新プラトン主義以外に別の領域もやった方が就職には有利だよと助言しました。井出直人君は山口大学出身で、京都学派の哲学をやっていたんですが、博論は完成しなかったかな。佐藤郁之君は、宗教言語と宮沢賢治をテーマに扱って学位を取りました。井門（富二夫）先生や荒木先生からご指導を受けていた学生とも関わりました。笹尾（典代）さん、谷口（智子）さん、海山（宏之）君、平良（直）君。あと岩崎（賢）君、山田（政信）君、岩崎（真紀）さんとか。それから、韓国の沈（善瑛）さん。ルーマニアのリアナ・トルファシュさんは、シンボル理論と伝統思想で学位をとりました。

武内義範先生がお亡くなりになった時に、追悼の文章を荒木美智雄先生が書かれています。京大文学部の『以文』という雑誌なんですけど、コピーしてお渡しします。これは武内先生と荒木先生の関係がよくわかる追悼文です。それから、『超越する実存』という本があるんですけど、このあとがきで、私なりに方法論について学生に与えた訓示があって、モーセ十戒をもじって「申せ自戒」と言います。これもお渡しします。そこでも祈りとか直観、瞑想について書いています。それと、荒木先生がお亡くなりになって、お通夜に参って、翌日の告別式は別の学会の理事会が東京であったので参列できなかったんですが、私なりに書いた弔辞を奥様にお渡ししました。その弔辞を読んでいただけで、荒木先生と私の関係がわかるかもしれませんので、お渡しします。

木村：先生が京都の方に移られた後、筑波大学は先生のポストにどなたか入られたのでしょうか。

棚次：私の後任は保呂（篤彦）先生です。いまあそこは、山中先生が中心じゃないですか。昔の筑波大学は、すごい先生がいらっしゃいましたね。井門（富二夫）先生もそうだし、小川圭治先生とか、三枝（充恵）先生とか、錚々たる先生方でした。大学創立当初は筑波ではなく東京にお住まいになり、授業の時だけ筑波に来られる先生も多かったようです。私にとっては、筑波で教えた経験は、非常に大きな財産になったと思います。荒木先生からエリアーデ宗教学を教わったわけですし、いろんな先生方との出会いもありました。東大の先生方とも、筑波は比較的近距离なので、交流することも少なからず

ありました。金井（新二）先生は、いまどうされていますか。

藤原：いまはご自身の元々の信仰に近付いてご研究をされているような印象がありましたね。最近ではシェリングを研究されているとおっしゃっていて、いまのお勤め先の関係で、近代日本のキリスト教のこともなさっていますし。

棚次：私がシカゴ大学に行った時には、筑波大の木村武史君と宮本要太郎君がいましたね。藤原先生はもうちょっと前でしたね。

藤原：先生は先ほど理想的と思われる学者のお名前を何人か、プラトンとかシュタイナーとか挙げられましたが、ご自身の学風に近い学者は、日本の国内ではどの辺りでしょうか。共感するというか、同じ立ち位置を持って研究していると見ていらっしゃる方は。

棚次：誰ですかね、いないですね。みんなちょっとずつ繋がってはいますけど、ぴたっと重なるような人はいないですね。会って話をして、よく気が合う人はいますよ。そういう人は、鎌田東二君もそうですし、町田宗鳳さんとかいますが、津城（寛文）君なんかわりと合う方ですね。ただそれぞれみんなやっていることが違いますしね、私は私の中の第三期、京都府立医科大学に行って、やはり科学との関係というのをもう少しきちっとやった方がいいという思いがだんだん強まってきました。それは既存の科学の枠内で何か科学的検証や実証をしようというのではなくて、もっと別の形の科学があるかもしれない。高野山大学の寄付講座の資金を使って、「宗教と科学の対話研究会」というのを作り、十何回かやって来たんですが、こういう研究会は続けたいなと思っています。既存の科学を包み込むような何か新しい科学がありうると思いますね。それはどんな科学かという、やはり意識を正面から扱った科学ですね。いまの科学は意識を括弧に入れているんです。実験する時だって、実験者、実験対象みんな意識を括弧に入れていて（つまり、意識の影響は無視できるとして）、それで実験をやるんです。もし実験者の意識がそこに反映されているとしたら、これはすべてやり直しになるわけです。物質とか生物の研究も、意識の要素を組み入れた研究が今後起こってくるのではないのでしょうか。そうすると、それは超科学になる。ある意味で、既成の宗教の枠を超えて超宗教になるというのと、構造的に似ているんですね。私は、既成の宗教教団の認識というのは、それはそれで尊重されるべきですが、たぶんそういうものの根底が割れて深まっていくような、そういう事態が起きるように思っています。だから用語としては従来通りの用語を使うかもしれませんが、もっと解釈が深まっていくというか、そういうことが起こると思っています。涅槃にしても三位一体にしても、その他どんな宗教用語でもそうですが。

藤原：私が学生の頃にトランスパーソナル心理学とかそういうのがいろいろありましたけれど、それに近いものですか。

棚次：それはいまどういう状況ですかね。

藤原：一時期ずいぶんもてはやされましたけれど、ぱたっとなくなって。

棚次：日本では吉福（伸逸）さんが中心になって翻訳をした時代が過ぎて、後継者がいないと言われています。パーソナル（人格の）をどう捉えるかですね。当然、実存のあり様というのはペルソナだと思います。それを越えたところもちろん人間にはあるんです。自己論の観点で言うと、いわゆる自我とそれを越えた自分、真我と呼んでもいいんですが、その二重の自己の関係をきちっと論じることができるかどうかですね。そこがポイントだと思います。一方だけに視点を固定して論じることが、比較的簡単だと思いますが。

宮嶋：最後にお一つ、大きな話なので聞くのをためらっていたのですが、超越というのは先生にとって重要なファクターだと思っていて、以前人間の内面にウェイトを置いてスピリチュアリティの話をした時に、先生から、超越というファクターがなければスピリチュアリティという言葉を使う必要性はないんだというようなぐらいの、私はその時、縦軸というのを先生が強調されているのがわかったのですが、たとえばいまのお話でも、やはり超越との関わりというか、人間の実存のあり方というのをお考えになっているんだろうなと思ったのですが。

棚次：そうですね、超越という仕方で語ることはできると思います。ただ、この本にも書いているんですが、問題は超越をどう捉えるかですね。一般的には、実存を踏まえた超越というのがわかりやすい。実存は *existence* で、*ex* と *sistere* ですね。「外に立つ」というのが実存の意味です。自らの外に立つこと。そうだとすると、実存とは超越するんだということで、『超越する実存』という書名をつけたんです。超越を実存の方に置かないで、隠れた本体の方に置くと、この超越の捉え方がまた変わってきます。それこそヒエロファニーみたいな、根源の世界がこの世界へと開かれてくるという、そっちの方向からの超越という言葉づかいも可能かもしれません。通常は、「超越と内在」というふうにセットになっています。内在というのも一種の超越の契機をはらんだ内在があると思います。たとえば、聖なるものあるいは神が、われわれの内に働いているという時に、われわれの内ってどこなんだと疑問に思います。この内は自我と同レベルの内ではないわけです。自我をもう一つ内側に突き破ったところです。それは内在と言ってもいいし、超越と言ってもいいし、超越的内在と言ってもいい。

宮嶋：メビウスの輪のように、内在が超越であり、超越が内在でありというような、そういう関係性にあるということですか。

棚次：実存を超えたもの、アートマン（真我）とかどういう言葉を使ってもいいんですが、それがどこか遠くにあると思っただけは駄目です。ここに現にある。ここと言ったって実存のここじゃないんだけど、それとびたっと一つになっていると思うんですが、どうでしょうか。その関係をどうすればわかりやすく説明できるか。「役者」と役者が演じる「役柄」で説明すると、わかりやすいかもしれない。舞台上で誰か役者が、たとえば市川團十郎が弁慶を演じているとします。観客は弁慶を見ているんだけど、團十郎が演

じている弁慶を見ているんですね。ただ、ドラマに巻き込まれてドラマの中に入っている人にとっては、弁慶がいるだけです。團十郎も弁慶を演じつつ、弁慶になりつつ弁慶でない部分も持っています。その微妙な関係に近いのではないか。この譬えで面白いのは、弁慶はドラマの中で死ぬかもしれない、しかし團十郎は死なない。役者の團十郎も死ぬよと言われると困るのですが、この比喻では、役者（真我）は死なないんです。生とか死の領域を超えたところにある存在、生滅する世界を超えた世界にあるものです。この認識が、哲学のレベルでも失われてしまっている。永遠なるもの（不死）が考え難いような状況になっていると思います。哲学の危機ですね。そうは言っても人間は死ぬ。それは役柄が死ぬんです。棚次正和という役柄は死にますが、これと一つに働いている真我は死なないのです。こういう話をすると、それ宗教じゃないのとなって、学問から外れるように思われるのですが、ではいったい何を学問と呼んでいるのですかと尋ね返したいですね。

藤原：先生はそういった学問観で筑波大学あるいは京都府立という公立の大学で教えていらっしゃって、それでやりにくかったことなどはおありですか。

棚次：筑波大学の時は、やはり周りにいろんな研究者がいて、いろんな考え方があるので、ずいぶん勉強になりました。学生も卒論とか修論に選ぶテーマがまちまちで面白かった。府立医大に移ってからは、専門の学生が一人もいないんです。教養教育で、医学教育の最初の1年とか1年半の間の教育と、大学院の授業を少し担当していました。これは何を話しても伝わらない、というか学生は無反応で、吐いた言葉が虚しく消えていく。どうしようか、それこそ異界に迷い込んだぞという意識が強かったですね。このやり方じゃ駄目だと思って、ある時から短冊状の記入用紙を用意して、授業の最後に質問を書いてもらいました。次の週に主だったものを紹介して、質問に答えるのですが、これをやり始めてから、彼らは彼らなりに考えていることに、ようやく気付きました。だから本当にそれまでまったく知らない空間の中に入り込んで、どうしようかと途方に暮れた、そういう記憶が強く残っています。

木村：そういう意識が変わってきたというような感覚は、この十数年の間で、お医者さんの中で話が通じる人が増えてきたとか、そういうのは。

棚次：いまでも医者の方の中ですね、こういう話がわかる人がいらっしゃることはいらっしゃるんです。でも圧倒的に少ないですね。自然科学優先という医学教育のシステムの問題もあります。

木村：生命倫理の問題ですとか、それこそターミナルケアですとか、そういうことが医学界の中でもずいぶん取り上げられるようになってきていますけれど。

棚次：徐々にであって、それも……

藤原：さっきおっしゃったように常識の範囲でしかということですかね。

棚次：そうです。いまの医療のシステムの範囲内でどう対応するかということしか考えていませんね。私はむしろいまの医療システムそのものが問題かもしれないと思うのです。生とか死も医療システムに取り込まれていますが、顧慮されずにはみ出ている部分が多いので、それをきちっと視野に入れないといけない。誕生も死も病も老いも、要するに生老病死すべてが、医療の中に取り込まれているという、とんでもない事態になっているのではないのでしょうか。

木村：それでも最近では、医療の方でもやっていけないので在宅というようなことが盛んに言われるようになってきて、私たちがやっている臨床宗教師というのもその辺りと関わっていると思いますけど、お医者さんの中にも徐々にこれじゃ駄目だなというのが出てきている気はしますね。

棚次：いま私は、「いのちの医療哲学研究会」というのを開いているんですが、そこには医者の先生がかなりいらっしゃいます。そういう先生はよくわかっておられる。この医学で本当にいいんだろうか。一般的にはだいたい病気を敵対視するわけです。この捉え方って果たしてどうなんだろう。ヒポクラテスとかナイチンゲールはとても重要ですが、なぜ彼らの思想をもっと正確に読まないんだろうかと思います。みんな都合のいい解釈をするのです。ナイチンゲールなんか、「病気は自然の回復過程」だと言っているのに、看護の人たちはそこをしっかりと学ばないようです。看護は医学にすっかり従属した形です、おかしい話です。

宮嶋：今日のお話で、先生の第四期の、これからの先生の宗教哲学の展開というのがすごく気になると……

棚次：第三期の時点で宗教研究を半分やめているので、あとは小説を書くことと、俳句を作ることですね。いままでやりたかったけど、やっていないものをやろうかなと思っています。それと幾つかの研究会に関わって、本当に志のある人たち同士を繋ぐことですね。

宮嶋：あと科学と宗教との関係というテーマが重要な展開があるのかなと思って。

棚次：それは私の大きなテーマです。超科学というか、脱科学を目指す科学者もいるんですよ、実際。そのような人を講師に呼んで話を聞いたりしています。そうするとね、宗教の世界にものすごく近いという閃きがあるんです。

久保田：先生は脱科学・超科学へ向かう途上で、おそらくは既存の学問分野の中で、こちら辺だったら超科学の端緒が見出されるんじゃないかと思うような学問分野がありますか。先ほど心理学の話が出てきましたけれど。

棚次：やはり自然科学の場合、ベースは物理学だと思います。量子力学ですね。超弦理論などいろいろ出ていますが、そういう最先端のものが突破口を開くかもと予想してい

ます。

久保田：人文系ではいかがですか。

棚次：人文系だと，宗教学はもっと頑張らんと「あかん」のだと思いますね。人文系の中ではもっとも遅れて成立した学問の一つでした。遅れてきたということは，人間と自然を繋ぐ包括的な総合の学にもなりうるので，そこを目指してやってほしいものです。

藤原：この機を活かして，私たちはそういった方向性を目指さなくてはいけないということで。どうもありがとうございました。